

# 会社も元氣・心も元氣・体も元氣

今月も先月に続き「京セラ会計学」のご紹介を致します。今回、ご紹介する内容も「厳しいな～」と感じられるかもしれません。しかし『現代の製造業では、「不良品ゼロ」というのが当たり前というほど品質に対する要求は厳しいのが現実である。それはすべてのプロセスにおいて、完璧な仕事できていない限り実現できない品質レベルである。このように、研究開発や製造業では、わずかなミスさえ許されず常に完璧な仕事が求められるのである。ところが経理などの事務職では、間違えば「すみません。直します。」ですんでしまう。ミスを犯しても消しゴムで直したり、パソコンのキーボードを打ち直しできると思っでは、完璧な仕事は決してできないのである。』……と京セラでは考えている。

## 3 筋肉質経営の原則

企業は永遠に発展し続けなければならない。そのためには、企業を人間の体に例えるなら、体の隅々までに血が通い、つねに活性化されている引き締まった肉体を持つものにならなければならない。つまり、経営者は贅肉の全くない筋肉質の企業を目指すべきである。

しかし、見栄を張れば、贅肉ばかりが付き、不要な負担を増すばかりとなる。本質的に強い企業にしようというのであれば、経営者が自分や企業を實力以上によく見せようという誘惑に打ち克つ強い意志を持たなければならない。

そして、筋肉質の経営をするために重要なことは、原材料費などの操業度に運動する、変動費を下げるだけでなく、固定費を一定もしくはできるだけ下げ、利益率を高めるとのことである。

## 4 完璧主義の原則

完璧主義とは、曖昧さや妥協を許すことなく、あらゆる仕事を細部にわたって完璧に仕上げることを目指すものであり、経営においてとるべき基本的な態度である。リーダーたるものは常にパーフェクトな決断を求められる。会社を経営する社長も、その判断が会社の運命を左右する。社長は従業員とその家族、顧客、株主、協力会

社などに対し、重大な責任を負っているのである。

その重大な責務を果たすために、経営者たるものは会社全体のマクロな仕事と同時に、部下のやっているミクロの仕事も十分わかっていなければ、完璧な仕事はできない。部下が休んだ時でも、自ら代わって仕事ができるくらいでなければ、本当の長たる資格はないとさえ言えるのである。そのためには、足繁く現場へ出て、現場の雰囲気、現場のことを知らなければならないのである。

## 5 ダブルチェックの原則

「ダブルチェック」とは、経理のみならず、あらゆる分野で、人と組織の健全性を守る「保護メカニズム」である。

仕事が、公明正大にガラス張りの中で進められるということは、その仕事に従事する人を、不測の事態から守ることになる。それは同時に、業務そのものの信頼性と、会社組織の健全性を守ることにもなるのである。このダブルチェックは、人間不信や性悪説のようなものを背景としたものではなく、底に流れているものは、むしろ人間に対する愛情であり、人に間違いを起こさせてはならないという信念である。

たとえば、京セラでは、銀行印は金庫の中の印鑑箱に保管をし、金庫のカギと印鑑箱のカギを別々の人が持ち、印鑑を押すのも2人確認のもとで行うことにしているという。

今回は、「京セラ会計学」の最終回となります。「6. 採算向上の原則」「7. ガラス張り経営の原則」についてご紹介致します。

参考文献：稲盛和夫『稲盛和夫の実学—経営と会計』日本経済新聞社、1997年。



### 三宅税理士事務所

財務コンサルタント  
経営学修士(MBA)

所長税理士 **三宅 孝治**

〒710-0803 倉敷市中島2370-14

TEL: 086-466-1255

<http://www.cms-miyake.info>